

【暗証聖句】

「だが、驚くには当たりません。サタンでさえ光の天使を装うのです。だから、サタンに仕える者たちが、義に仕える者を装うことなど、大したことはありません。彼らは、自分たちの業に応じた最期を遂げるでしょう」コリント二 11 章 15 節

【日・神秘主義】

神秘主義とは、神や宇宙の究極的根拠などとされる絶対的存在を、人間が自己の内面で直接に体験しようとする思想のことを言います。また、絶対的に他なる者との合一により、必然的に自己からの脱却、あるいは自己という枠を突破することを神秘体験と言います。神秘主義の対立的思想は、理性主義などがあげられます。このような神秘主義的思想は、教会の中にも入り込んできており、聖書の権威を、み言葉そのものではなく、自らの主観的な神秘体験に置き換えてしまいます。それがどれほど驚くべき、あるいは感動的な体験であったとしても、み言葉を土台としないならば、これは大変に霊的な危険な状態であり、終わりの時代の教会に対するサタンの惑わしの一つとなります。サタンは神秘体験を経験させることで、神様から人の心を引き離そうとしています。特に、終わりの不安定な時代に、多くの人がこのような神秘主義に惹かれていく傾向があります。

キリストは賢い人と愚かな人のたとえの中で、明確に述べています。

マタイ 07 章 24～27 節 「そこで、わたしのこれらの言葉を聞いて行う者は皆、岩の上に自分の家を建てた賢い人に似ている。雨が降り、川があふれ、風が吹いてその家を襲っても、倒れなかった。岩を土台としていたからである。わたしのこれらの言葉を聞くだけで行わない者は皆、砂の上に家を建てた愚かな人に似ている。雨が降り、川があふれ、風が吹いてその家に襲いかかると、倒れて、その倒れ方がひどかった。」

確かに、聖霊の素晴らしい霊的な感動や体験はあります。それは私たちの信仰を強めたり、高めたりするものとなることでしょう。しかし、そのことがみ言葉をなおざりにしても良いという理由にはなりません。常に、み言葉を第一にすることが、サタンの惑わしから守られる最大の方法なのです。

【月・臨死体験】

臨死体験とは、文字通りに言えば死に臨む体験です。現在では医学技術により、停止した心臓の拍動や呼吸をふたたび開始させることも可能になったため、心肺停止から蘇生する人の数は過去に比べて増えています。心停止の状態から蘇生した人の 4～18%が臨死体験を報告されています。臨死体験では、具体的に「体外離脱」「光体験」「人生回顧」などの体験をし、死に不安と恐れを感じている人にとっては、希望と慰めとなるようです。この臨死体験が問題となるのは、このことが靈魂不滅の根拠として用いられることが少なくないことです。果たして、この臨死体験を私たちはどう理解したら良いのでしょうか。

聖書の中には、まさに臨死体験をした人たちが出てきます。亡くなってすぐに息を吹き返した人もいれば、4 日もたってから生き返った人もいます。ところが、興味深いことに誰一人として、天国であれ、地獄であれ、死後の世界について語っている人はいません。この事実は、聖書が教える死者の無意識の状態と一致しています。では、これほど広く一般に広がっている臨死体験を、どう考えたら良いのでしょうか。二つの可能性があります。一つは科学的・医学的な説です。脳に生理学的・化学的な変化が起きて、これが誘発する幻覚とする脳内現象説、脳内麻薬物質であるエンドルフィンの分泌により起こるというエンドルフィン説、死に瀕した人の脳に供給される酸素の濃度が低下する酸素欠乏説など。ただ、どの説に対しても反論があります。もう一つはサタンの超自然的、かつ欺瞞的な経験です。特に、亡くなった親族と会ったと主張している場合に、その可能性があります。いずれにしても、聖書の教えに固く立つということが大切です。

【火・靈魂転生】

靈魂転生(輪廻転生)とは、命あるものが何度も転生し、人だけでなく動物なども含めた生き物に生まれ変わることを言います。もともとはヒンドゥー教、さらにはその前身であるバラモン教の教えからきており、輪廻とは、サンスクリット語のサンサーラ、「さまようこと、歩き回る」という意味があり、信心と業・行い(カルマ)によって、次の輪廻(来世)の宿命が定まるとしています。この靈魂転生は明らかに聖書の教えと異なり、日本においてはこれが問題となることはほとんどありませんが、国によってはクリスチャンの中にも信じている人がいるようです。SS ガイドでは以下の 5 つのポイントをあげて、聖書の教えと異なることを教えています。

- ① 聖書の死と復活に対する教えと異なる。
- ② キリストの贖いを信じる信仰により、主の恵みによって救われる(復活する)という教えと異なる。
- ③ 永遠の運命は、この世での決断・選択によって決まるという教えと異なる。
- ④ キリストの再臨の意味と実際性を軽視する。
- ⑤ 人は死んでもなおやり直すチャンスはないという教えと異なる。

【水・心霊術と先祖崇拜】

日本で最も広く行われているのが先祖崇拜です。社会学の分野では、「先祖祭祀(さいし)」という言葉が定着していますが、死んだ先祖から生きている子孫たちに影響することを信じ、あるいは先祖から何らかのものを貰えるという信仰のことを言います。日本では先祖を、「ご先祖様」、「ホトケ様」と呼んで、位牌を仏壇の中央にまつたり、お盆や彼岸には、これらの霊をまつる行事が広く行われています。このような先祖崇拜が成立する背景には、先祖の霊が生きて、子孫を見守ってくれているという信仰があります。先祖を大切にすることは、多くの日本人の日常生活や文化の中にしみこんでいます。この先祖崇拜が心霊術と結びつくことも少なくありません。生きてどこかで見守っている先祖の霊や亡くなった家族と交信する試みです。そして、霊媒師を通して、本当に彼らが霊となって生きているかのような出来事も起きているようですが、嘘や騙しもたくさんあるようです。

サムエル記上 28 章に、ペリシテ軍との戦いに恐れをなし、主に託宣を求めたが何の答えも得ることができなかったサウル王が、霊媒師の女に、死んだ預言者サムエルを呼び出してもらおうと言う場面が出てきます。一度は主の教えに従って、国内から口寄せや魔術師を追放していたにも関わらず、恐れあまり再び頼ったのでした。すると、死んだはずのサムエルが現れたのです。しかし、これはサムエルではなく、サタンの力によるものでした。人類のあけぼの下 P362, 363 に次のように書かれています。

「口寄せの女のじゅもんによって現われたのは、神の聖なる預言者ではなかった。サムエルは、あの悪霊の巣くつにいたのではなかった。この超自然的出現は、サタンの力によるものにほかならなかった。サタンは、荒野でキリストを試みたときに、光の天使を装うことができたのと同様に、サムエルを装うことはやさしくできたのである」

サウルは、サムエルが生きていたときには、彼の勧告を軽んじ、その譴責に立腹したものでした。しかし彼が窮地に陥ったとき、預言者を頼ったのでした。ところが、天の使者と交わるために地獄の使いに頼る結果となってしまったのでした。サウルの悲痛な叫びに答えて、サムエルの姿を取ったサタンは、「主があなたを離れて、あなたの敵となられた…主はイスラエルをも、あなたと共にペリシテびとの手に渡されるであろう」と、さらに不安に陥れる言葉を語ったのでした。これはサウルが神様の声に真剣に耳を傾けてこなかった結果でした。それと共に、口寄せ(心霊術)に頼ることは聖書で禁止されているにも関わらず、サウルは口寄せに頼ったことも、サタンの罠にはまる原因を自ら作ってしまいました。

申命記 18:10~11 「あなたのうちに自分の息子、娘に火の中を通らせる者があってはならない。占いをする者、ト者、まじない師、呪術者、呪文を唱える者、霊媒をする者、口寄せ、死人に伺いを立てる者があってはならない」

使 19:19 「また魔術を行っていた多くの者が、その書物をかかえて来て、みなの前で焼き捨てた。その値段を合計してみると、銀貨五万枚になった」

【木・悪霊の偽装とその他の出現】

霊媒師の力に頼ることはなくても、それと似た現象が起こることがあります。いわゆる幽霊を見たという人は世界中にいますし、教会の中でも、時々亡くなった家族が現れたと証言する人がいます。そのような場合に、悲しみのある遺族に対して、それは悪霊ですよとは、なかなか言いにくいものです。そうならないためにも、いつもみ言葉に何と書かれてあるのかしっかりと学び、理解しておくことが大切です。

コリント二 11 章 14 節には、「サタンでさえ光の天使を装うのです」とあり、エフェソ 6 章 12、13 節では、「わたしたちの戦いは、血肉を相手にするものではなく、支配と権威、暗闇の世界の支配者、天にいる悪の諸霊を相手にするものなのです。だから、邪悪な日によく抵抗し、すべてを成し遂げて、しっかりと立つことができるように、神の武具を身に着けなさい」とあるように、私たちの敵はサタンであることを覚えなければなりません。だからこそ、様々な心霊現象や輪廻転生などの教えが人々の中に簡単に広まってしまうのです。サタンの目的は、私たちが聖書の正しい教えから引き離すことです。聖書に反する教えや現象に惑わされないように注意しましょう。